

## 中国の吉祥モチーフについて

## はじめに

一般に「吉祥図案」「吉祥モチーフ」と呼ばれるものは、中国伝統文化における「幸福」を目に見えるように表したものである。吉祥モチーフを分析していくと、人々が何を理想とし、追求していたのかが見えてくる。吉祥とは、中華民族の生活の様々な場面の「装飾」を支配する最大の要素であると考ええる。現在でも「福」の字を逆さまに吊るした装飾をよく見かけるが、これは「逆さま」という意味の「倒」と、「やってくる」という意味の「到」をかけて、「福がやってくる」ようにとの願いが込められているのである。このように吉祥をテーマとした装飾芸術は、常に

人々の生活と深い関わりを持っている。その数は豊富で、絵画、版画、陶磁器、剪纸（切り絵）、服飾など多くの分野に渡っているが、本論文では絵画に焦点を当てることとする。

井上 裕紀子

## 第一章 中国絵画における吉祥モチーフの研究史

中国絵画史の中で吉祥モチーフの研究は極めて乏しい。花鳥・草虫画研究では技法や装飾性の高さを述べたものが多く、描かれたものの意味に注目することは少なかった。一方、民間版画・陶磁器・工芸品の文様については吉祥意の解明が進んでいる。花鳥や草虫のモチーフは、数多の動

植物から選ばれて描き継がれているのであるから、そこには単なる写意以外の意味が存在するのではなからうか。

九六年、宮崎法子氏の論文(一)で、モチーフの意味に触れられてこなかった理由として、中国絵画は文人中心の芸術観が支配的であったため、絵画の精神性が特に重視され、具体的な場に飾られるという絵画の側面は看過される傾向が強かったことが挙げられ、花鳥・草虫図に描かれる多くのモチーフは吉祥の意味を帯びていることが論じられた。宮崎氏によれば、花鳥画のモチーフの吉祥の意味が確認できるのは、宋代まで遡るといふ。従来、花鳥画の評価では、宋代は写生的な表現が高みに達し芸術的価値が高く、明から清に至ると装飾性が重んじられ俗性を帯びると言われてきた。そのため、宋代の花鳥画も吉祥の意が込められているとすることには少なからず抵抗があるようだが、宮崎氏は藻魚図や蓮池水禽図といった例を挙げながら、宋代の花鳥画が写実性だけでなく吉祥を意図したものであったことを論じている。

また王耀庭氏は、これまでの花鳥画研究は、文人画における南北二宗論に似た、風格上の区分によって語られてきたと指摘した(二)。例えば「没骨」か「鈎勒」かといった技法の違いや、「徐黄異体(徐熙は野逸、黄家は富貴)」

といった趣の違いである。花鳥画研究はそこで留まっているのが現状であり、花鳥画が本来持っている画外の意については論じられていないという。王氏はさらに、「そもそもモチーフを描くときには、純粹な作者の主観(『見たものを描く』)ではなく、『要るものを描く』のであって、何を描くかという選択にはモチーフの寓意が最先の条件であった。言い換えるならば、花鳥画は写生を建前としておられるけれども、やはり社会的に作られた審美思想を反映しており、固定化・類型化した要求(願望)に応えたものである。」とも述べている。王氏はこのような観点から、明代の宮廷画の多くが吉祥を寓意していることを例証している。

以上のような先行研究に基づき、第二章では具体的に草虫画に描かれるモチーフの吉祥の意味を分析する。第三章では、文人画家の作品に吉祥の意味が含まれる可能性について述べていく。

## 第二章 草虫図の中の螳螂と蟬の意味について

本章では、明代から清代の草虫図の中で繰り返し描かれている、螳螂が蟬を描えるモチーフが何を意味しているの

かを問題とする。作品例を挙げると、図一は明代の朱郎筆「螳螂捕蟬」である。このように扇面に描かれる場合もあれば、図二の沈銓筆「餐香宿艶図卷」のように画巻の一部に現れることもある。また、図三は蔣廷錫「臨元人捕蟬図」のような作品もある。

螳螂が蟬とセットではない状態の場合、その発音 (tang lang) は「当郎 (dang lang)」に通じる。「郎」とは官名で、漢代は尚書郎、隋代は侍郎、唐代は郎中という役職があり、明・清時代には六品以下の文官を指した言葉である。従って「当郎」は官位に就くという意味になり、螳螂が吉祥モチーフであることは明白である。しかし蟬を捕える図様の場合、すぐに吉祥とは判断し難い。もし螳螂が捕えているものが蟬ではなく、蜂であったならば、「蜂 (feng)」は「封 (feng)」と同音であるから、「官位に封じられる」という意味になり得る。だが「蟬 (chan)」では、その発音から吉祥の意味を持つ漢字や語句を連想できない。

この問題に関しては、現時点で二通りの解釈が出されている。まず Wen, C. Fong氏が、このモチーフは『莊子』を踏まえており、政治的状況、すなわちモンゴルの支配下にあったことを反映しているという解釈を行った(3)。

その『莊子』(4)の一節とは、次の部分である。

莊周、雕陵の樊に遊ぶ。一異鵠の南方自り来たる者を觀る。翼の広さ七尺、目の大きさ連寸、周の頰に感れて栗林に集う。莊周曰く、「此れ何の鳥哉。翼股いなれど逝かず、目大なれど觀ず。」裳を蹶げて履歩し、彈を執りて之を留う。一蟬の方に美蔭を得て其の身を忘るるを觀る。螳螂翳を執りて之を搏たんとし、得を見て其の形を忘る。異鵠従りて之を利とし、利を見て其の真を忘る。莊周恍然として曰く、「噫、物は固より相累し、二類は相召す。」彈を捐てて反走す。虞人逐いて之を諍る。

蟬の背後を螳螂が狙い、螳螂は自分を狙う鳥がいることに気づかない……という説話を想起させることによつて、漢民族を支配したモンゴルは螳螂のようなものだ、と風刺した表現であるという説である。

もう一方の解釈は宮崎氏によるもので、他の草虫図のモチーフの意味から見ても、政治的状況の反映という解釈ではあまりに浮いてしまうだろう、『莊子』に基づくものとしても何らかの吉祥あるいは厄除け的な意味に解釈できるのではないかと述べている(5)。

筆者も、何らかの吉祥的な意味を持つていたと考え、かつ Wen C. Fong 氏の解釈も同時に当てはまる、二重の意味を持つモチーフではないかと考えている。なぜならば、確かに政治的状況の反映というのは草虫図の中では異色ではあるものの、『莊子』に由来する「螭螂捕蟬、黃雀在後」という句は成語化しており、知識人であれば螭螂が蟬を捕える図を見てこの説話を思い出さなはずはない。螭螂捕蟬の故事から、社会に対して風刺的な意味を発していた可能性も否定はできない。また、吉祥の意味を持つていると考える理由は、花鳥・草虫画は裝飾性の高さが大きな特徴であり、「裝飾」機能を前提として描かれるのであればモチーフは好ましい意味を持つものが選ばれろと想像できるからである。まず螭螂については前述の通り、吉祥の意味が明白である。蟬は、その発音からは吉祥の意味が見出せないものの、文様としてはかなり早い時代から現われている。周代にはすでに銅器に蟬文鼎がみられ、漢代の玉器にも蟬を象つたものがある。しかしながら、吉祥図案を解説する書のほとんどは、蟬の項目を設けていない。伝統吉祥図案の中には一般に含まれない図像のようである。古代における蟬の意味については高浜秀氏が、漢代の玉器は死者の口に含ませるものであることから、蟬の羽化に新たな生

命を得る意を託しており、また宮廷では侍従官の冠の裝飾に使われた、と解説している(6)。ここで注目すべきは、宮廷で侍従官の冠の裝飾に蟬が使われたという所であり、もしそのように使われていたのであれば蟬が高官に就くことを寓意していたと考えられるのではなからうか。『後漢書志』(7)を引いてみると次のような記事がある。

侍中、中常侍は黄金を加へ、蟬を附して文と爲し、貂尾を飾と爲す。

この古代の服飾制度が、明代に入って復活している。『明史』(8)の「輿服」の部分には次の記事がある。

一品から九品に至るは、冠上の梁数をもつて差を爲す。公の冠は八梁、箆巾貂蟬を加へ、立筆五折、四柱、香草五段、前後に玉蟬。

《大漢語字典》(9)を引いてみると、確かに蟬は「蟬冠」の略称という字義を持つと書かれている。「蟬冠」は、『漢語大詞典』(10)によれば元來高官の服飾を指し、後に広く高官を指す語となった。また古代御史大夫の冠服の意

味で「蟬冠多繡」という言葉もある。ただし、現代中国語でこれらの語が使用されているとは考え難く、いつ頃までその意味が通用していたのかはつきりしない。だが《漢語大詞典》は文学作品から例文を出しており、「蟬冠多繡」が「聊齋志異」(11)「夢狼」で使用されていることが分かる。

……丁、一門を指して曰く、此の間、君家の甥なり。時に翁は晋令たりし姉子あり、訝しんで曰く、烏んぞ此に在るや。丁曰く、翁ほ信ぜずんば、入りて便ち之を知るべし。翁入りて、果たして甥を見るに、蟬冠多繡して堂上に坐し、戟幢行列して通すべき人無し。……

また、同様の意味の「貂蟬」の語が『紅樓夢』(12)第十五回に見える。

……這裡には接し連なりて親戚族中の人来来去去し、鬧鬧穰穰として、車馬は門を填め、貂蟬は座に満つる。……

以上の用例から、高官を意味する「蟬冠多繡」「貂蟬」といった単語が、清代までは通用していたと考えられる。

発音から官位に就くことを暗喩する蝻螂が、高官の衣裳を指し示す蟬を捕える、これは十分に吉祥祈願の意を表しているといえるのではないだろうか。場を飾るものとして好ましい吉祥の意味を持ちつつ、故事を想起させ、社会的状況の反映を試みているのが「蝻螂捕蟬」のモチーフであると結論したい。

### 第三章 文人画の中の吉祥モチーフ

#### — 沈周筆「写生冊」を例として —

本章では、沈周(一四二七—一五〇九)の「写生冊」を取り上げ、文人画家が描くモチーフの吉祥意について検討していく。「写生冊」は一四九四年、沈周が六十八歳の時に描かれたもので、全十六図から成る。沈周の作品の中で、この「写生冊」がどのように評価されているかを簡略に記すと、劉梅琴氏は、沈周の花鳥画は、「写生冊」など何でも自然界にある生意をそのまま忠実に伝達し、現実世界にある実景を生き生きと描き出していると評価している(13)。同様の評価は中村茂夫氏にもあり、「周の描く自然のものを描いたのであって、特定の思想や宗教観念を前提と

して選択されたものではない。(中略)則ち「無心」の心で自然に対し、個別の自然から受けた感動を言語や画に表現することによって、その自然が存在することの一つの意味又は目的を達成する。」と述べている(14)。このように、「写生冊」を含め、これまで沈周の作品の吉祥的な意味が詳細に分析されたことはなかった。その原因には、沈周が「文人画家」として高い評価を受けてきたことが深く関係すると思われる。吉祥画を描くのは職業画家であり、文人画家の作品に俗気はあり得ないというのが一般的であった。

### 一、絵画史における沈周の位置づけ

明代後期、何良俊・董其昌らによって南北二宗論が作られる過程で、沈周は次のように位置づけられていった。

何良俊『四友齋畫論』(15)

我が朝畫を善くする者甚だ多し。行家の若くんば當に戴文進を以て第一と為すべし。而して呉小仙(吳偉)、杜古狂(杜堇)、周東村(戴恒)は其の次なり。利家は則ち沈石田(沈周)を以て第一と為す。而して唐六如(唐寅)、文衡山(文徵明)、陳白陽(陳淳)は其の次なり。

董其昌『畫眼』(16)

文人の畫は王右丞(王維)自り始まる。其の後、董源、巨然、李成、范寬、嫡子と為る。李龍眠、王晉卿、米南宮(米芾)及び虎兒(米友仁)、皆董巨(董源・巨然)従り得來たりて、直に元四大家、黃子久、王叔明、倪元鎮、吳仲圭に至る。皆其の正伝なり。吾が朝の文沈(文徵明・沈周)は又是れ遠く衣鉢を接ぐ。馬夏及び李唐、劉松年の若きは又是れ大李將軍の派、吾が曹の當に学ぶべきにあらざるなり。

何良俊は行家(職業画家・専門画家)と利家(専門ではないが善くするもの、すなわち文人画家)の二派に分け、沈周を明代利家の第一としている。また董其昌は、沈周を王維に始まる南宗画の正統派と見なしていることがうかがえる。そして、この評価は現代に至るまでほとんど変わっていない。沈周は呉派の始祖であり、弟子の文徵明によって大成されたその書風が当時の文人社会においてもはやされた、という通説が、明代から脈々と受け継がれているのである。例えば Richard Edwards 氏は、沈周は呉派の指導者であるというのが中国における伝統的評価であり、今日でもその作品の高い歴史的価値は揺るぎないとし、当

時は彼一人が真の独創性を持った天才であったと述べている(17)。従来、明代絵画史では、南宗画の流れをくむ呉派を文人画家のグループと見なし、北宗画の流れを汲む浙派、すなわち職業画家のグループと対立させ、結論として文人画である呉派の方が優れていると考えられてきた。呉派とその後の発展、董其昌に至るまで、その中心に在るのが沈周であるという評価が多数を占めているのである。

しかし鈴木敬氏は、「中国における沈周評価が異常に高いのは迷信である」と指摘した(18)。そして、「沈周以降の呉派は、まったく違った画家たちの集合体であり、呉派という単一概念でまとめられるような単純なものではない。にもかかわらず、その複雑さを単純化し、先祖を遡って行けば行き着くところには沈周がいるというのが、中国絵画史家の到達した結論である」と批判している。だが、その問い直しに関連づけた個々の作品に対する研究はほとんど進んでいない。宮崎法子氏は、「文人の描く花卉雑画のモチーフのほとんどは、吉祥性が明らかかなものである。

本当に無名の花を偶然にスケッチ風に描くことなど、絵画史上なかつたと思われる。」と述べ、文人の描く花鳥画草虫画には、吉祥的な俗の意味と、文人精神を表す雅の意味の、二重の要素が存在していたと論じている(19)。以下、

宮崎氏の論に基づいて「写生冊」全十六図に描かれたモチーフを検討する。

## 二、モチーフについて

### 第一図・玉蘭

玉蘭にはさまざまな意味がある。例えば、靈芝と組み合わせれば、靈芝の芝と玉蘭の蘭で「芝蘭(立派な文人)」という意味で使われる。また玉蘭の玉と海棠の堂で「玉堂」、すなわち裕福な家を表す。このように玉蘭は、他のモチーフと組み合わせで吉祥意を成すことが多い。玉蘭だけ描かれた場合は意味の特定はできないが、おそらく吉祥的な意味を持つているだろう、と推測する。

### 第二図・胡蝶花(三色スミレ)

胡蝶花の場合は、その名の「胡蝶」が重要な意味を持つているといえる。「蝶(die)」は「臺(die)」と音通であることから長寿を表している。

### 第三図・萱草(図四)

萱草は別名「忘憂草」ともいい、憂いを忘れさせるといふ好ましい意味を持つ。また、「宜男草」とも呼ばれる。これは妊娠中の婦人がこの花を佩びると男の子が生まれるという意味で、吉祥モチーフとなる(20)。

## 第四図・蓮(図五)

蓮は泥の中に生えていても美しく、「廉」と発音が通じ、仏教においても菩薩の仏性の象徴であることから、文人に非常に好まれたモチーフの一つである。さらに、「連(ian)」という字は「連(ian)」と発音が同じであるので、他のモチーフと組み合わせることによって、連続してゝする、という意味になる。そこで蛙の意味だが、「蛙(wa)」という字は、赤ん坊を意味する「娃(wa)」と発音が同じである。従って蓮とカエルの組み合わせは、連続して子供が産まれるという意味にとることが出来る。

## 第五図・蒲桃(ブドウ)(図六)

ブドウは蔓を伸ばして成長し、たくさんの実を付ける性質から、子孫繁栄の意味で描かれてきたモチーフである。

## 第六図・雁来紅(ハゲイトウ)

雁来紅は、「雁(yan)」の字が「延(yan)」字と音通であることから「延年」、つまり長寿を表す吉祥モチーフであると考えられる。

## 第七図・鶏冠(ケイトウ)(図七)

鶏冠は、冠の発音が、官僚の官と同じなので、官位に就くという意味がある。

## 第八図・菊

菊は長寿を表すモチーフとして有名である。その由来は不明だが、「太平広記」に長寿に効果があるとして紹介されている(2)。ため、その成立の九七七年頃にはすでに長寿の花として知られていたようである。

## 第九図・蟹蝦

蟹も蝦も、甲殻を持つている。甲を持つものが二つで二甲となり、「二甲伝臚」という吉祥語を連想させるのに十分である。伝臚とは、学位授与式という意味であり、二甲から科擧に合格するという意味を暗示している。

## 第十図・蠣房蚌蛤(カキとハマグリ)

「蠣(ri)」という字は、子供が産まれるという意味の「立(ri)」と同音である。また「蛤(ge)」は、兄という意味の「哥(ge)」とよく似ている(声調の異なる同音)。従ってカキと蛤を合わせて「長兄出産」の意味に取ることが出来る。

## 第十一図・蝻蚌(カニ)(図八)

カニの甲羅の甲という字は、甲乙丙の甲であるし、科擧に首席合格したものを指す語でもある。

## 第十二図・白鴿(ハト)(図九)

「鴿」は左側に「合」という字を持つことから、「和合」



を連想させるモチーフである。また「鳩」と書けば左側は「九(九)」となり、「久(九)」と発音を通じることから長寿の意を暗示する。

#### 第十三図・鶏(図十)

「鶏(三)」は「吉(三)」に通じ、それだけで十分に吉祥の意を表しているが、第七図の鶏冠と組み合わせて考えると「官上加冠」という吉祥句になる。鶏のトサカ(冠)に「官」に鶏冠の官が加わり、官の上に官を重ねる、すなわち官位の昇進を意味している。

#### 第十四図・鴨

鴨の場合は、鴨という字の左側に甲があるということ、蟹と同様、科挙合格の意味を持つ。第四図の蓮と合わせて考えれば(兄弟などが)連続して科挙に首席合格するという意味に解釈することもできる。

#### 第十五図・猫(図十一)

「猫(mao)」は、八十歳を意味する「耄(mao)」と発音と同じで、長寿を表すモチーフである。この猫の場合、おそらくは真ん丸に描かれていることがまた吉祥の意味につながると思われる。真ん丸という意味の「圓(yuan)」という字は「縁(yuan)」や、科挙合格の意味につながる「元(yuan)」と音通である。

#### 第十六図・驢

驢馬は「驢(三)」の発音が「禄(三)」に良く似ている。また、傍の部分が「驢」と共通であり、発音も似ているため、第九図・蟹蝦で出てきた吉祥句「二甲伝驢」の「驢」がここにあると考えることも可能ではないだろうか。

以上のように、一部にやや不明な点のあるものも含まれるが、この沈周の「写生冊」は総じて吉祥の意味を有していると言えるのではなからうか。

一般に文人画家は金銭を得るために絵を描いたわけではないというイメージがあり、特に沈周は、祖父も父も文人の名家の生まれで仕官もせず、悠々自適の生活を送ったと考えられてきた。林樹中氏は、出土墓誌などから沈周の家柄、家学及びその他を論じた論文(22)で、沈周の芸術活動は仕官しなかったために高度の完成を成し遂げたと述べている。内山和也氏も同様に沈周の家法、弟子による詩や記録から、沈周は金銭の多寡で画を売ろうとはしなかったと主張している(23)。

しかし新藤武弘氏は、沈周や文徵明でさえも書画の制作を経済的手段としていたことは明白であると述べている(24)。また鈴木敬氏は、いわゆる「文人画」という括りそ

のものに関して疑問を呈している(25)。「職業画家を何等かの形で絵画制作を生活の糧の一部にしていた者とし、文人画家を金銭とは無関係、世俗に超然と生きていた画家と意味づければ、文人画家は大土地所有者か、裕福な商業者、官僚、上級の僧侶などに限定されてしまう。」と述べ、実際のところ画家の収入がどのように得られていたのかは不明な場合が多く、少なくとも明末の文人画家といわれるものの多くは売画によって生計を立てていたと推測している。「写生冊」が誰に向けて描かれたものなのかという受容者の問題については、ほとんど知ることが出来なかつた。だが、沈周自身は生涯仕官しなかつたにもかかわらず、科挙合格や仕官を意味するモチーフが何度も描かれていることから、世俗の価値観を取り入れ、市井の需要に応じて描いた作品であるといえるだろう。吉祥モチーフばかりを集めた「写生冊」の存在は、沈周のような所謂「文人画家」でさえも、売画、もしくは金銭以外の礼品を受け取ることによって、経済的豊かさを得ていた、というひとつの根拠となりうるのではないだろうか。

最後に、本論文を簡単にまとめると、第一章では、中国絵画の中の吉祥モチーフに関する先行研究の流れを追っ

た。第二章では、具体的な吉祥モチーフの意味の解明を行った。特に、宮崎氏の論文で不明であった「螭螂と蟬」を組み合わせたモチーフについて取り上げ、考察の結果、『莊子』を基にした社会風刺とも取れる文人的意味に加え、官位の獲得という吉祥の意味があることを論じた。続いて第三章は、沈周を例に文人画にも吉祥モチーフが描かれていることを述べてきた。現在では意味の分からなくなつてしまつた吉祥モチーフは花鳥画・草虫画の中に多数存在している。特に従来文人画という枠の中に収められてきた作品は、今後の研究により吉祥意があらためて発見されていくと思われる。

#### [注]

- (1) 宮崎法子「中国花鳥画の意味(上)」『美術研究三六三号』一九九六年一月「中国花鳥画の意味(下)」『美術研究三六四号』一九九六年三月
- (2) 王耀庭〈裝飾性與吉祥意 試說明代宮廷花鳥畫風一隅〉《呂紀花鳥画特展》台北故宮博物院、二〇〇一年、一五四頁

(3) Wen. C. Fong, *Beyond Representation*, New

York Metropolitan Museum of Art, 1992

- (4) 陳鼓應注訳《中国古典名著訳注叢書 莊子 今注今訳》、中華書局、一九八三年

〈原文〉：莊周遊於雕陵之樊。觀一異鵠自南方來者。翼広七尺、目大運寸、感周之類而集於栗林。莊周曰、「此何鳥哉。翼殷不逝、目大不覩。」蹇裳躩步、執彈而留之。觀一蟬方得美蔭而忘其身。螳螂執翳而搏之見得而忘其形。異鵠從而利之、見利而忘其真。莊周恍然曰、「噫、物固相累、二類相召也。」捐彈而反走。虞人逐而辭之。」

- (5) 前掲論文(1)

- (6) 高浜秀「中国古代の吉祥文」『特別展 中国美術にこめられた意味』東京国立博物館一九九八年
- (7) 司馬彪撰・劉昭注補《後漢書志》中華書局、一九六五年

〈原文〉：侍中、中常侍加黃金、附蟬為文、貂尾為飾、謂之「趙惠文冠」。

- (8) 張廷玉等撰《明史》中華書局、一九七四年

〈原文〉：一品至九品、以冠上梁數為差。公冠八梁、加籠巾貂蟬、立筆五折、四柱、香草五段、前後玉蟬。

- (9) 大漢語字典編輯委員會編《大漢語字典》四川辭書

出版社・湖北辭書出版社、一九八六年

- (10) 漢語大詞典編輯委員會編《漢語大詞典》上海辭書出版社、一九八六年

(11) 蒲松齡著・朱其鎰主編《中国古典文学読本叢書 全本新注 聊齋志異》人民文学出版社、一九九八年

〈原文〉：……丁指一門曰：「此間君家甥也。」時翁有姊子為晋令、訝曰：「烏在此」丁曰：「倘不信、入便知之。」翁入、果見甥、蟬冠多繡坐堂上、戟幢行列、無人可通。……

- (12) 曹雪芹著・中国芸術研究院校注《中国古典文学読本叢書 紅樓夢》人民文学出版社、一九九八年

〈原文〉：……這裡接連着親戚族中的人来来去去、開開穰穰、車馬填門、貂蟬滿座、……

- (13) 劉梅琴「沈周の隱逸生活とその芸術」『藝叢』十号、筑波大学芸術学系芸術学研究室、一九九三年

- (14) 中村茂夫「沈周—人と芸術—」、文華堂書店、一九八二年、三三二頁

- (15) 黄寶虹・鄧実編《美術叢書》、江蘇古籍出版社、一九八六年

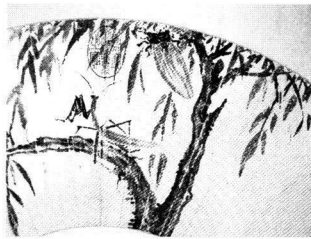
- (16) 黄寶虹・鄧実編《美術叢書》、江蘇古籍出版社、一九八六年

- (17) Richard Edwards, *The Art of Wen Cheng-ming*, Univ. of Michigan, 1974
- (18) 鈴木敬『中国絵画史 下(明)』、吉川弘文館、一九九四年、一八四頁
- (19) 前掲論文(一)
- (20) 『博物志』に次のような記述がある。「萱草。食之令人好歡忘憂思。故謂忘憂草。婦人有孕。佩其花則生男。亦名宜男草。故称母萱草。」(張華撰・范寧校證『博物志校證』中華書局、一九八〇年)
- (21) 『太平広記』に次のような記述がある。「菊能輕身盖氣令人久壽徵。」(孫潛手校談《太平廣記・校補本》中文出版社、一九七二年)
- (22) 林樹中「研究資料 新発見の沈周史料(上)」「国華」一一一四号、一九九八年六月「研究資料 新発見の沈周史料(下)」「国華」一一一五号、一九八八年七月
- (23) 内山知也『明代文人論』、木耳社、一九八六年
- (24) 新藤武弘『山水画とは何か―中国の自然と芸術―』、福武書店、一九八九年
- (25) 鈴木敬「文人画の問題―董源についての一試論―」「国華」一二二八号、一九九七年、四月、三頁

付記 本稿は平成十三年度学習院大学卒業論文を書き改めたものである。紙幅の都合上、研究史と図版の多くを割愛した。



図三 蔣延錫筆「臨元人捕蟬圖」部分 (清代)



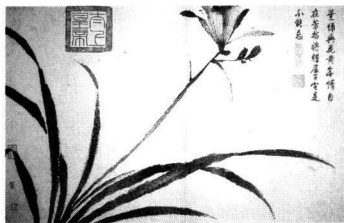
図一 朱郎筆「蠶螂捕蟬」(明代)



図二 沈銓筆「餐香宿艶図卷」部分(清代・十八世紀)

沈周筆「写生冊」

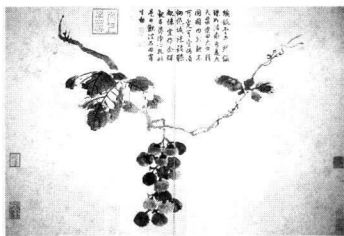
絵本、水墨（第五図のみ着色）一冊 全十九葉，十六図 台北故宫博物館蔵



図四 第三図 萱



図五 第四図 荷花蹲蛙



図六 第五図 蒲桃



図七 第七図 鶏冠花



図八 第十一図 蝸蚌



図九 第十二四図 白鴿



図十 第十三図 鶏



図十一 第十五図 猫